

本書は「癩予防二関スル件」(1907年公布)に一端を発する、ハンセン病患者を療養所に強制的に隔離するといった「絶対隔離政策」の歴史の中で、医師としての藤野豊が、患者の連院治療、通常の入院治療を行った小笠原登について、彼の日記を読み解くことでその実像を著す。

日記とは本来、他の人に読まれることを意図していない。「早上日記」に綴られたもの、「備忘録」、大学のノートに書かれた小笠原の日記を、くせ字のひとつひとつを丁寧に読み解き、関連する史料や周辺の人たちの証言を分析し記された内容が明らかにしている。

小笠原はハンセン病発症には体質が関連しており、

にいがたの一冊



予防には栄養状態の改善が必要であると主張した。当時、多くの医師がハンセン病を強い感染力を持った不治の病として捉え、患者の隔離以外に根絶の方法はないとした知見とは異なるものであった。それ故、小笠原の功績は正しく評価されなかつたといわれる。

しかし、医学上の知見の相違だけが原因ではない。ハンセン病を社会から排除し、患者を隔離した国策と無関係ではなかつたのだ。

孤高のハンセン病医師 小笠原登「日記」を読む

不要な隔離への怒りにじむ

医学界がその国策に従従する中、小笠原は伝染性の強い不治の病という迷信を批判し、社会的な視点でハンセン病を診よとした。

その学説が受け入れられた。さらに小笠原の実践として希望であり救いであった。なかっただ背景には、医学上を支えた人たちがいた。小笠原は学会では孤高であつても、社会から孤立しては離れ恐れ日々不安な思いのなかで生活する患者の苦悩、医師として関わる自身の苦う中で、自身の研究への強悩、不要な隔離を行う療養所への怒りを日記に綴る。その言葉は力強く胸に迫る。著者は気がついていない。この本がそのハンセン病患者の絶対隔離と対立しながらも、共存していた多くの研究者に励まして力を与えてくれたことを。

小笠原は治療により病気を治すことを重視したが、隔離することをすべて否定した訳ではない。隔離する

■六花出版・194円
部教授)

高橋 淳子
(新潟青陵大学短期大学)